

私の座右の書「葉隠」



あがりほまクリニック 湧上 民雄

高校までを沖縄で過ごした私にとって本土での大学生活は新鮮な驚きの連続でした。これまで関心のなかった事に急に興味が沸いてきました。論理学という講義があり、先生の熱のこもった独特の語り口が私の心を引きつけました。実存主義などという、これまでまったく関心のなかったことに魅了されました。人はどう生きるべきかというたいそうな問題に目覚め、早速図書館に行き、ニーチェ、サルトルらによる著作の訳本を読みあさりました。しかし、悲しいことにまったく哲学的な素養のない私にとってこれらの著書は難解でほとんど理解できませんでした。結局、図書館通いは1週間ほどで終わり、いろいろ借りていた本もすべて返してしまいました。我ながら熱しやすく冷め易い性格だと痛感しました。その後、臨床実習が忙しくなり、研修医生活に入ると人生について考えるなどということもなくなり、哲学書などはまったく縁のない生活を過ごしておりました。

前置きが長くなりましたが、私が現在、時々読み返し、決断の時の指針としているのが鍋島藩の山本常朝が300年以上も前に記した葉隠の書です。簡潔にまとめられておりますので一気に全文を読むことができますが、読み返すとなかなか蘊蓄に富んでおり味わい深い書です。「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」の一句が有名ですが、戦時中に特攻隊員を鼓舞し、死を賛美する書として戦後に非難の対象となりました。確かに戦後の民主的な教育とはかけ離れた考え方であり、当然非難はあったものと思います。最初にこの本に触れたのは高校生の時でした。その時は作者の意図がよく理解できず、武士道という言葉と過激な表現が印象に残

っていました。30代半ばになったころ、何気なく古本屋で三島由紀夫が解説した「葉隠入門」を見つけ出しました。三島は葉隠の書を絶賛しており、座右の書として記しておりました。三島の解説を読むと現代社会における葉隠の意義がおぼろげながら理解できました。

一見すると葉隠の表現は過激ですが、山本常朝が生きた封建社会の生活を自由な権利が保障された現代の我々が覗き知ることはできません。葉隠は体系立てられた哲学書ではなく、君主を中心とした封建社会でどのように武士が生きるべきかという処世訓を思いつくまに書き記したものです。葉隠の最も有名な一節「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」に続く句は「人間一生誠に僅かの事なり。好いた事をして暮らすべきなり。夢の間の世の中に、すかぬ事ばかりして苦を見て暮すは愚かなることなり」と続きます。山本常朝は死に物狂いと表現するエネルギッシュな武士の行動を賛美すると同時に、人の一生をはかない夢幻と言っております。仏教的な世界観に通じる面があるように思われます。この二面性が葉隠の書をより味わい深いものとしております。葉隠は堅苦しい説教じみたものではなく、人がどのように生きるべきかの極意をわかりやすく明快に述べたものです。たとえば人に忠告する場合も相手のことを良く理解し、親しくなってから忠告をするなど用意周到な計画を立ててから行うべきだとしております。相手を怒らすだけの忠告は単なる憂さ晴らしにしか過ぎないと述べております。現代社会に生きる私達にもあてはまるみごとな処世術です。「武士道とは死ぬことと見付けたり」と言い切る人物のイメージとはかけ離れた筆者

の繊細な一面を物語るものです。

また、決断の仕方についても「葉隠」独特の表現で私が印象深く思った箇所があります。「大事な思案は軽くすべし」という一節ですが、大事なことというのは本来大変少なくせいぜい2つ3つしかないもので、そのようなことは常日頃考えているので、即座に決断できるものだという意味です。逆に小事は熟慮すべきであるとも述べております。

もともと葉隠は山本常朝が語った事をまとめて文章にしたものですので厳密な文章ではなく随所に矛盾が見受けられると三島も述べています。しかし、私には本書のこのような独断的明快さと種々の矛盾が逆に人生の真実を言い表しているように思えるのです。武士道という日本独特な考え方は現代社会で生きていく我々にも通じるものが多々あり、自身の決断の一助となる書であると思っております。



環境汚染、食の安全性を考えさせる3冊の本



今帰仁診療所 石川 清和

「沈黙の春」

レイチェル・カーソン 新潮社 1962年

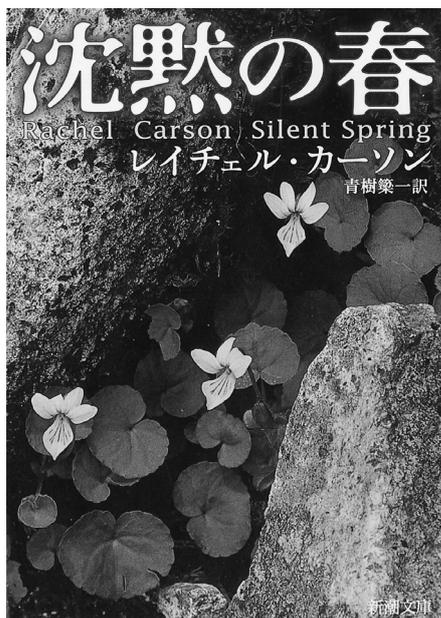
1962年に発刊された農薬・化学物質による環境汚染・健康被害の拡大を警告した本である。害虫駆除や除草の為、農薬が畑や森にまかれ害虫と一緒に様々な昆虫が死に、続いて鳥たちが死んで森に沈黙が訪れる。再読して最初に読んだ時の強烈な印象を思い出した。現在も私たちは微量ではあるが様々な化学物質・農薬を無防備に摂取したり暴露され続けている。現在年間10万種類を超える化学物質が工業的に生産され、その内約5,000種類は1,000トン以上使用されている。それぞれの毒性は低くても、複合汚染、食物連鎖による蓄積した時の毒性はきちんと評価はされていない。増え続ける不妊症、子どもたちの問題行動、生活習慣病・癌、鬱や衝動的行動等への関わりを問いかけさせる。2006年北海道産の有機栽培の南瓜から検

出された残留農薬（30年前に使用禁止になった有機リン系農薬）の問題は、自然環境への様々な化学物質・農薬の散布・蓄積が深刻な問題である事を物語っている。また最近の蜜蜂の失踪事件は彼女がこの本の中で予言した「昆虫がいなくなる実りのない秋」が現実になりつつある一つの現象なのかもしれない。

「ハチはなぜ大量死したのか」

ローワン・ジェイコブセン 文藝春秋刊 2009年

原題「fruitless fall」はレイチェル・カーソンの最悪の未来図の一つであった。2005年から始まったミツバチの大量死、あるいは巣箱が空になる行方不明の蜜蜂たちが大きな問題になっている。その原因の最も疑わしいのは有機リン系農薬に変わる新たな農薬として汎用されるようになったネオニコチノイド系農薬である。これらの農薬は種子に浸透させるだけで、植物が成長しても植物全体に浸透し、花粉や蜜を通して昆虫に移行していく。大量に使用された農薬、化学物質は土壤中に蓄積し、その農薬を植物が吸収浸透することで花粉や蜜を通してハチたちに取り込まれていく。農薬の量は極微量で急性毒性はなくても、様々な農薬が慢性に作用することで蜜蜂たちの免疫力を低下させ、疾病にかかり易くしたり、また巣箱の位置が分からなくなったり、社会行動（成虫になりまづは育児蜂・女王世話蜂・巣板建設蜂と仕事の分担が分かれ、育児蜂が次に貯蔵蜂となり蜜や花粉を加工するようになり最終的には採餌蜂となって外で花粉や蜜をとりに行くようになる、仕事の分担が変わっていく）が出来なくなったりしている可能性がある。ネオニコチノイド系農薬は



//////////////////////////////////// 本の紹介 //////////////////////////////////////

アセチルコリン受容体に結合しその機能不全を引き起こす。人間においてのコリン受容体機能不全の代表疾患はパーキンソン病とアルツハイマー病であり慢性中毒は人類の未来へも暗い影を投げかけている。



し、農家自身も保健所、厚生省ともに農薬による害を否定し続けた。そのため彼は自分自身でパラチオンを散布した野菜を食べる人体実験をしたのである。その結果、農薬の慢性中毒には「毒物自身の蓄積」以外に毒物が体内で分解される過程で起る人間の軽微な体細胞の障害が蓄積して起る「作用の蓄積」があるとした。不眠、焦燥感、鬱等、ふるえ等の神経症状、肝腫大、口内炎、下痢等の胃腸障害、手足の冷え、低血圧等の自立神経失調症状、さまざまな症状を呈すると指摘している。現在でも日本の単位面積当たりの農薬の使用量は世界一であり、アメリカの約10倍である。現代の様々な健康問題・社会問題化する行動異常が長期にわたる農薬・化学物質の影響の可能性を指摘する。

今回紹介した3冊の本は医療関係者の皆様がいま一度読んでいただきたい本である。

「生命の医と生命の農を求めて」

梁瀬義亮 地湧社 1998年

第2次世界大戦で開発され生産された大量の有機リン系毒物は戦後農薬として普及していく。1950年代からその毒性に警鐘を鳴らしたのが梁瀬義亮である。(レイチェル・カーソンよりも早い) その当時は、収穫後の野菜を日持ちがよくなるという理由でパラチオン(有機リン系農薬)を入れた水に漬けて出荷するのが流行っていた。そのため、有機リン農薬の慢性中毒による、肝障害、癌、精神障害による自殺が急増し梁瀬医師は農薬の害だと指摘した。しか

